

筑前城下の作（広瀬淡窓）

伏敵 門頭 浪 天を 拍つ

当時の 築石 自ら 依然たり

元兵 海に 没す 蹤 猶お 在り

神后 韓を 征する 事 久しく 伝う

城郭 影は 浮ぶ 春浦の 月

絃歌 声は 隠る 暮洲の 煙

昇平 象 有り 君 看取せよ

処々の 垂楊に 賈船を 繋ぐ

伏敵門頭浪拍天 當時築石自依然  
元兵没海蹤猶在 神后征韓事久傳  
城郭影浮春浦月 絃歌聲隱暮洲煙  
昇平有象君看取 處處垂楊繫賈船

解説 九州福岡城外で敵国降伏の四字の管崎八幡宮の楼門を望み、また、波頭を眺め、神功皇后の征韓、元寇の役などの往事を追想し、現下の太平のさまを述べたもの。

語釈 ※伏敵門頭 敵の降伏を祈願するための額「敵国降伏」が掲げられている門の上。 ※拍天 波が高くうねって天にとどくばかり。 ※築石 敵を防ぐため、石を積んで塁とした物。 ※依然 長年、波に洗われ風に暴かれても、元の堅固さを保っているさま。 ※没海 元兵・高麗の水軍は、二度とも颶風によって、大半が海に没した。 ※征韓 いわゆる三韓征伐。 ※城郭 城の囲い。 ※春浦 春の浦辺、海岸。 ※絃歌 管絃の楽器と、歌声。 ※暮洲煙 川にたちこめる霧。 ※昇平 太平、平和。 ※象 事象。 ※看取 よく見るの意。 ※垂楊 柳。 ※賈船 商船。

通釈 「敵国降伏」の四字を記した宸額がかかっている管崎八幡宮の楼門のあたりには、波が高く天をうち、文永の役後、元の再度の来襲に備えて築かれた石垣が長年の風雨、波浪に洗われながら、今もそのままの姿を留めている。元兵の海中に没した跡もまだ残存しており、更に、さかのぼって神功皇后が三韓征伐をされた事跡も伝わっている。しかし、今はそうした由緒ある戦跡とは別に城とその周囲の石垣が春浦の月に照らされて影を浮かべ、絃歌の音が夕ぎりの霞む渚から聞こえてくる。この太平静穏の姿をよく見たまえ、あちらこちらのしだれ柳に沢山の商船が繋がれている。この太平を築いてくれた祖先に感謝すべきではなからうか。